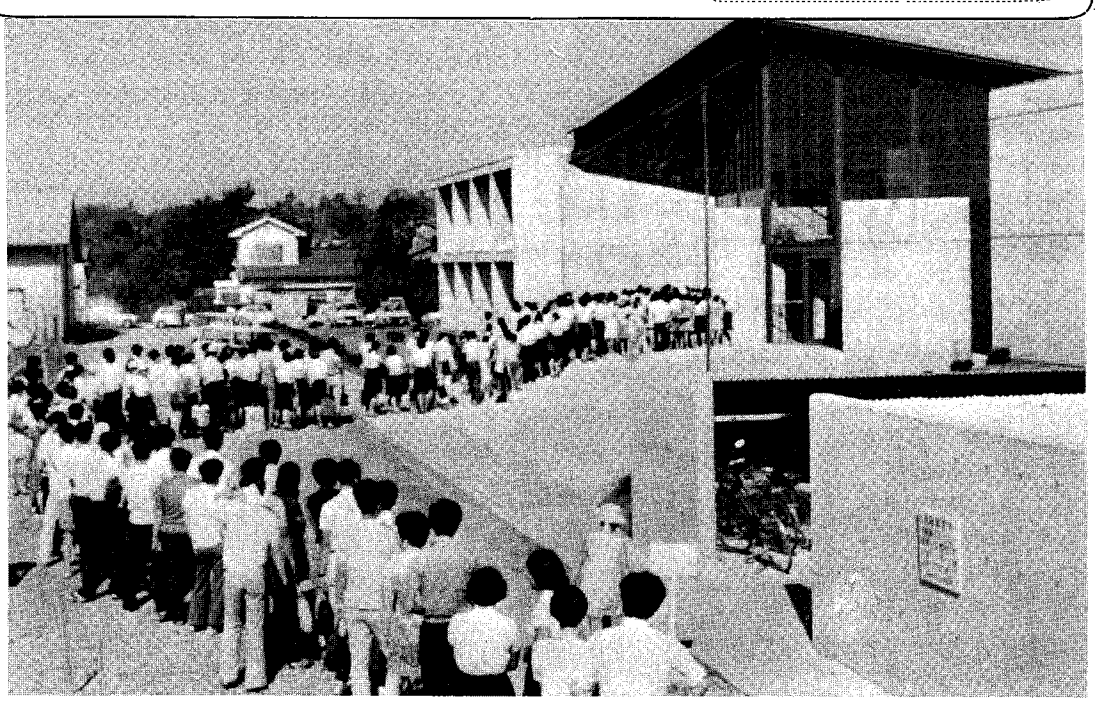
島根県立図書館報

図書館だより

号数　第23号
発行日　昭和48年8月1日
編集発行　島根県立図書館
松江市内中原町52
TEL (0852) 22－5725
印刷　㈲高浜印刷所



夏休みと図書館

緑陰の恋しい季節である。昔は暑を山寺に避けて、読書にふけったり、国家試験や入学試験の準備をした人も少くなかった。ぜいたくな夏の過し方でもあったかもしれない。

今は冷房のおかげで、市井にあっても夏の暑熱を避けることはできる。山寺ならぬ図書館にこもれば、絶好の読書や勉強の場がとれるのである。学校は夏休みに入っているし、そうなると、図書館のにぎわうのは、必然の勢いかもしれない。

夏季の図書館利用者には、高校生がとくに多いときく。それは大変結構なことである。しかし、自分さえよければ、といった無自覚な行為も、高校生に多いと聞いている。多数の利用希望者が待機している時に、一日中、席を独占したり、もっとひどいのになると、来もせぬ友人の席を数時間もおさえている、といったケースもあるという。図書館は公共のもの、みんなのものである。しかもそれは、読書や勉強の場所である。書に親しむ人間が、そんな場所で、エゴむき出しの無自覚な行為をするようでは、何のための勉強、何のための読書かと疑いたくなる。図書館とは、己れをみがく場所でもある筈である。

図書館は、お互いがゆずりあって利用する場所、満員になっても、人なきが如く、静かな場所でありたい。それは、利用者みんなが心がけて、そうするより外はないのである。我々の図書館を、いつも、読書人の精神に包まれた、すがすがしい場所としたいものである。

松江北高等学校長　兼折　博

郷土史講座

隠岐の歴史

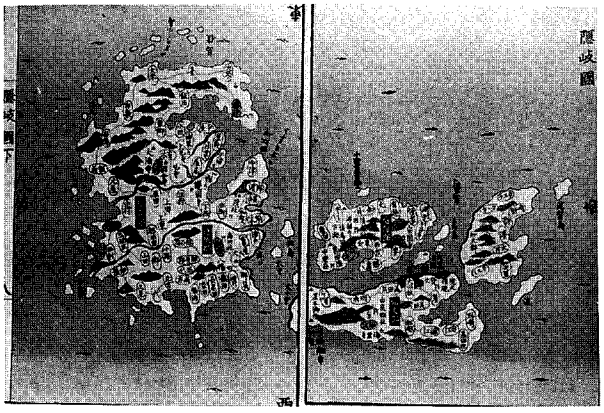
飯南高等学校々長
田　中　豊　治

Ⅰ　離島の歴史

隠岐の歴史を論ずる場合、どのような側面からその歴史的性格を把えるかによって、その歴史像はかわって来ている。

ここでは離島という、環境の中で、有機体としての隠岐の歴史的社会がどのように発展したかという点に焦点をあててみたいと思う。

考古学者が明らかにしたように、隠岐の歴史は、縄文期までさかのぼれる。山陰地方の黒耀石の供給地が隠岐であったことは更に明らかにされている。縄文人が丸木船で、隠岐と本土を往復した様子は、近世の帆船時代の小型船による隠岐と本土との交通から見てあまり困難な事ではなく、春夏の凪の時にはかなり快的な航海が出来たと思われる。



徳川末期から、明治初期にかけて、隠岐の船人が小型帆船で、竹島往復した事から推察しても、現代人が考えるより、かなり活発に隠岐の島人は本土と往復したと思われる。

弥生遺跡は久しく隠岐で発見されなかったが、昭和40年代に、八尾川改修工事の時、河床下２Ｍの位置から遺跡が発見され、地名にちなんで「有木月無（あらきつきなし）遺跡」と命名された。

ついで、都万（つま）から、海土（あま）からも確認されるにいたった。今までのものは河床下、水田下に埋没したものの発見で、更に新らしい史実の発見が期待される。

古墳時代の遺跡はかなり豊富であるが、その性格は出雲文化の亜流の如くで、隠岐独特の色彩はうすいように思う。

隠岐が地理的位置の関係から、大陸文化を踏石的に日本に伝える中継地点とし、大陸文化を色濃く持っているのではないかと問題視されるが、現在の知識では否定的で、因伯雲石地区を親元とする文化圏に隠岐は含まれていたようである。

日本の古代史の中で、隠岐は他国に比べて、記、紀、六国史にその名がしばしば登場するところを見ると、何かその理由がなければならない。

私見では、その最大の理由は７世紀から８世紀にかけて、我が国と、朝鮮半島との軍事的緊張が強まり、隠岐が日本の国防第一線になった故であると思う、烽、軍団、中央政府からの指示等が歴史的事実として指摘出来、隠岐国府、国分寺等の機能が躍動した事であろう、従って中央文化の移入も、本邦山間僻地より直接的に流入した事と思われる。

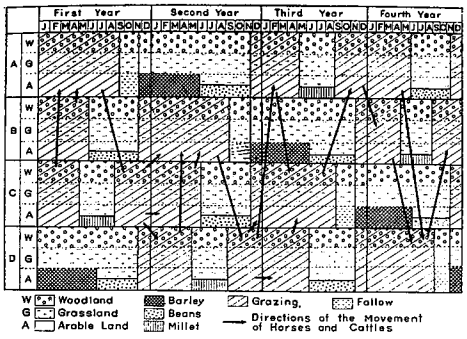
国分寺の蓮華会の舞等は八世紀の中央からの直移入であろう。

中世から近世中期にかけて、隠岐の経済社会は、封建体制下の特色を発揮する。最近学界で問題になっている「村落共同体」が隠岐で典型的に形成された事は特筆に値する。

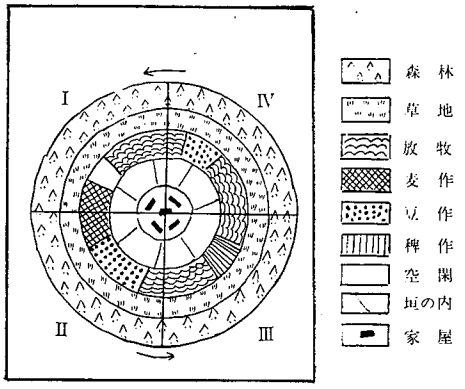
第１図から第３図までに牧畑の性格を示す内容を図示したが、これは孤立的、封鎖的な地域が、有機体として、自らの生存を維持する村落共同体としての経済形態で、隠岐の特殊現象ではなく、西欧社会においても、封建的村落共同体として成立した経済形態である。

隠岐が古代以来、近世末期にいたるまで、流刑島として多数の犯罪者が配流されたが、その理由は隠岐が島としての隔絶性、孤立性を強く有していた故であるが、同時に社会経済的に村落共同体としての地域社会が形成され、配流者を村落社会が包含同化する共同責任体制が形成されていた事は看過出来ない。配流者が土着し、村人の中に同化した事例が極めて多いのは、隠岐島の村落社会がいわゆる「講組結合」(相互扶助）を基盤として形成され、それが親方を頂点とする上下関係と縦横有機的に組織化されていたからに他ならないと思われる。

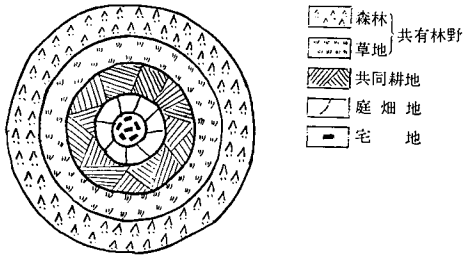
後島羽、後醍醐両帝の配流に対する島民の反応も、増鏡、太平記の記争が示すように、多分にドラマチックであり、これも、何も、明治以後の皇国史観の歴史の歪曲とのみは断ぜられない。徳川期の学者、文人、例えば西鶴の著書、又は、視聴合紀の記事などを見ても、理非善悪、栄枯盛衰は別として、隠岐島社会の流人の受入体勢は充分に温情的であって、悲劇の中に一片の情緒がある。



第1図　牧畑の輪転図（筆者原図　1957年度ＩＧＵ英文報告より）



第2図　牧畑の土地占取様式

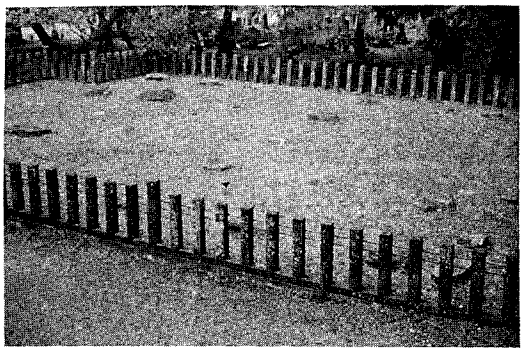


第3図　ゲルマン的村落共同体の土地占取様式

II　広域社会への隠岐の参加

隠岐の封鎖性がやぶれて、島が広い社会に接触して行くのは、近世末期であるが、このきっかけとなったものは、寛文年間（1661－72）における西廻海運の開発、享保年間（1716－35）における隠岐産の長崎俵物の中国貿易への参加などである。島内生産物が近世の国民経済流通構造の中にくみこまれる機会を得たので、木材、牛馬、大小豆、水産物の商品化が進んだ。

特に寛政（1789）以降、明治初期までの隠岐は日本海帆船交通の大動脈の中で、沖乗り航路の寄港地として大をなし、商品経済が発達した。その結果、封建制下の日本の人口が全体としては停滞又は減少を示しているのに、隠岐は享保６年に18千人、寛政10年に21千人、弘化３年には26千人と増加し、将に黄金時代を現出している。



▲国分寺跡

西郷町の地蔵院には薩州廻船中寄進の大石灯籠、堀立廻船中寄進の石の鳥居、泉州佐野廻船中寄進の灯籠、金毘羅神社には大阪の昆布問屋寄進の鳥居（破片）など、幕末隠岐が海運の根拠地となったことを示し、島前焼火神社参道の石灯籠は文字通り全国的な寄進者の名を示している。

明治２年（1869）の廃仏毀釈、つづいておきた隠岐騒動は、熱病の様な社会運動であった。元弘の昔、後醍醐天皇の行在所となり、隠岐随一の大伽藍国分寺も灰燼に帰し、今は唯、空しく礎石を残すのみである。島内一寺あますなく焼きつくした此の騒動は７年ののち、明治９年（1876）仏教復興となって、今日にいたっているが、隠岐の廃仏、隠岐騒動を通じて見られる運動の激しさ、極端さは、誠に異常で、島民の基本的な生活と理智から発生した社会運動とは考えられない。多分に情念的観念的な運動で、維新期の社会治安の回復と共に排仏も、騒動も流行熱のように冷却、社会は旧状に復帰し、明治新体制に移行して行った。

隠岐の歴史を日本歴史の中の地方史として位置づける事は勿論可能である。しかし、それと共に、有機体としての隠岐の離島的社会構造体の生活史としてこれを体系化する事も可能である。唯、後者の場合、それは隠岐の特殊史ではあり得ず、日本的な、否、世界的な歴史発展過程の中で、隠岐という離島経済社会が、如何に対応し、自らの自然環境に如何に適応して発展したかという見地から分析、総合されなければならない。

近代における隠岐は、資本主義経済体制の中で、むしろ高度工業化社会構造の中では実質的には疎外されて位置づけられて来た。観光隠岐の宣伝文化で一見華やかな虚名はうけているが、人口は残念ながら３万の大台を割り、過疎地化している。昭和15年３万２千の現住人口が戦前の最低人口であったが、今はそれ以上の過疎の進行である。ここに現在、隠岐の歴史的課題が現実的に提示されているわけである。

著書と私（その１）

「雲藩武道史」

島根大学教授
福　田　明　正

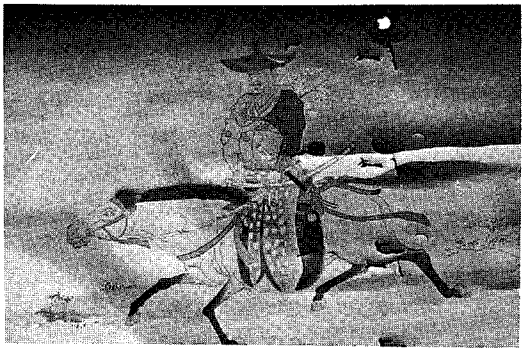
○ 内容 (1)前史――野見宿称　武蔵坊弁慶
山中鹿之助幸盛
(2)松江藩のさむらい
日本柔道の元祖寺田勘右衛門の直信流柔道
不伝流居合術流祖浅山一伝斎
不伝流開祖伊藤不伝
石倉半之丞の無上剣
松江藩の無手勝流
松江藩の柔道に舌をまいた豪力物外禅師
一指流管槍の開祖松本理左衛門定好
堅甲を刺通した善左衛門の妙技
松平治郷坤の巻を著わす
沢庵和尚と雲藩の武士
古武士の忠誠心
日置流弓術の名手子松山人時達
雲藩の曲垣平九郎矢島半兵衛の鳥術
一覚流拳法の川瀬兵蔵
岡本流体術、寄藤流杖術、鹿島流棒術等
(3)　付録
松江藩武術年譜、武術家一覧表

○ 研究の動機その他

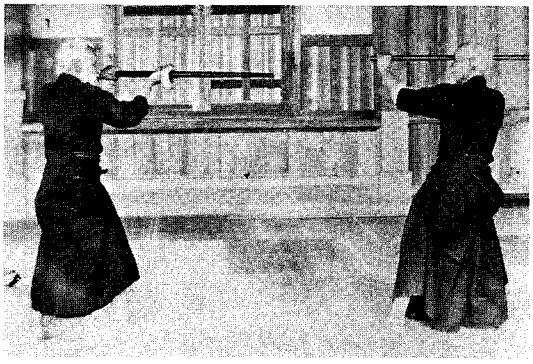
▲浅山一伝斎の霊塔

緑したたる松江は大きな天災や戦災もなく又さしたる公害も犯罪もない昔のままの平和な人間味にあふれる城下町である。

松江藩では初代藩主松平直政に仕えた寺田勘右衛門満英が、やわらの術を伝授するに当って、術は末であり道は本である。術を練って道に帰る。術は道の作用であり道は術によって顕現するものであるとして日本講道館柔道が産声をあげる前、今から約300年も前に直信流柔道と呼んだが、それはお茶にもお花にも通ずるものであった。７代藩主松平治郷が茶禅一味の境地を開き不味流の開祖であると共に剣禅一如、剣身一体の極意を究めた武道の藩主であった事は故あるかなと思われる。



▲貞経の乗馬姿



▲鹿島流棒術演武

松江藩の古武士等の物語の中に伝えられる雲藩の武道精神は、人間の道を求めたものであり、彼等の平和愛好の精神は無形の文化として伝承されている。明治のはじめ初代の島根県知事篭手田安定が着任早々興雲館道場を建てて天下一流の剣客を招いて武道を奨励してから 100年の歳月が流れたが、武道が平和への道、文武両道として全き人間形成の土台である事は古今を通じて政治家や教育家が肝に命じている所であった。然し第二次の大戦と共に武術となり、戦後の学校教材では武道の名称は捨てられて格技という用語で呼ばれるようになった。これは格斗技術という意味で現象面にあらわれた技術の皮相的な解釈から来るものであろう。格技の格は人格を意味し枝は道を意味するもので人格をみがくわざ即ち格道であれば武道と少しも変るものでないから別に格技と呼ばなくてもよいわけである。遠く寛永の昔平和を愛した雲藩の武士たちが術を道にまで高めた武道精神から見ればそれは全く逆行するものである。先年竣工した県立武道館が武道の名称を用いた事は平和を愛好する武道の根本精神が全県の津々浦々にゆきわたる事を願うや切なるものがあったと解している。

松江城西の清光院や天偏寺をはじめ市内の各墓所を尋ね水郷松江の平和郷を築いた多くの先師に再拝したい気持で一杯である。

著書と私（その２）

「奥出雲をさぐる」

横田中学校々長
高　橋　一　郎

1．内　容

前編一荘園「横田」の成立と変遷

①郷土史の原点を「出雲風土記」において、この時代の状況から豪族と荘園の原流をさぐり、②ここからさかのぼって原始、古代の遺跡を追うてその裏付をさがした。③そして記紀の記述の中にさらに資料を求め、④この歴史的背景のもとに、石清水八幡宮領の出現を浮ぼりにし、⑤この優れた荘園をめぐる平氏、源氏、北条氏等の武士団の動き、年貢銭納と、荘園の変遷、経済の変りをのべ、足利期に入ってからの⑥下地中分、⑦南北朝の対立と奥出雲、⑧明徳の乱と横田を明らかにし、重宝であったこの荘が、仙洞御所料、泉漏寺領に分けられたことにふれた。

後編――戦国の乱世と三沢氏

源氏系の三沢氏の擡頭と、これと対立する尼子氏、尼子毛利両氏の間に介在して伸びんとする三沢氏を追うて戦国時代末で終る。

2．著書の動機

「あとがき」にも述べたように、私の小学校時代、郷土史熱が高まっていたことが、心の底に残されていた。若いころからの読書癖が各方面に及んでいたが、歴史にも関心がむいていた。荘園に関する幾冊かの読書が、私を資料の積極的収集へ走らせた。まとめるうちに、日本歴史の各時代の特色が、そのままこの奥出雲に流れていることを知り、非才をかえりみず出版したものである。詳細は「横田町誌」に資料とともにのせている。ただ近世については素描にとどまっているが、郡家時代の未公開のぼう大な文書をひもといて、近世の庶民生活史、その経済生活をまとめたいと思っている。現在、古代から現在に至るまでの砂鉄製鉄史の資料収集をはじめている。

資料集めの終った「雲州算盤史」の前に、「物語雲州そろばん」を出版したいと思って現職の多忙（統合中学校建設と経営）の中を脱稿へと急いでいる。

島根郷土研究家実態調査

――リスト作成中――

図書館郷土資料コーナーでは、昭和43年に郷土資料室を設けてから、日々その充実に努力してきました。郷土人文庫、ヘルン文庫等を設置し、一方では古文書やその他県下に散逸している貴重書、郷土に関するあらゆる書物を収集しております。最近、郷土への関心が高まり、多くの人々がそれぞれに研究を行っておられますが、県の中央図書館である本館で、これら研究家の現状を把握し、相互の意見交換や、本館においてレファレンス業務の参考とし、今後の郷土研究発展の一助にしたいと思っています。

昨年３月県下各市町村教育委員会、各高校公共図書館、大学、高専等へ「郷土研究者の実態調査」を依頼しました。その結果、依頼数 101通に対し回答数46通、紹介研究者数は 239名でした。これにより、未回答の所へ再度調査依頼を行い、紹介研究者に対して、より具体的、かつ正確な把握をするため個々に調査表を配布しました。これには、「研究者名」「現住所」「職業」「生年月日」「研究事項」「著述発表とその年代」と各項目に分け、研究事項欄には、古代、中世、近世と時代別、出雲、石見、隠岐等地区別、考古学、文学、民族学、生物学等学問別か、たたら、茶道のような具体的な記入のいずれかを記してもらいました。この回答書によって最終的に、依頼した項目別にリストを作成し、氏名、研究分野ごとに引き出せるような冊子にする計画です。

今までの調査によって、すべての研究者の把握ができたとはいえません。この他に、郷土の小さな橋の由来や、岩石の採集など、地味ながら貴重な研究を行っておられる方を、捜したいと思っておりますので御協力下さい。

◆◆◆館内閲覧システムの変更◆◆◆

―― 利用者に一層便利に ――

昭和43年10月新館開館以来、一般図書、参考図書（事典、辞書等）郷土資料をそれぞれ別の場所に配置していたが、利用面等で不便な点があり今回全資料を一箇所に集中配架して利用できるよう次のように変更した。

1. 資料室の設置――郷土資料、参考図書、一般図書コーナーの三部門からなり要所要所に閲覧席40席置き、書架と書架の間隔を今まで以上に広くして資料の利用を容易にした。また室内に職員を3名配置して資料の案内や館外貸出の手続き等も同時に行なうようにした。
2. 第二読書室――身障者、高齢者専用読書室の設置

   従来学生等の利用が多く年配の方や身体障害者の方々に不便をかけていたが、これらの方々のために特に設置した。
3. こども室について――中学生を小学生と分離して資料室を利用させ、こども室は幼児と小学生の場とした。
4. 入館証の廃止

   今回の変更に伴ない入館証システムを廃止し利用者の負担を軽減した。

2 階

■**ブラウジングコーナー**
一般向き図書や雑誌を配架し閲覧が自由にできるようになっています

■**資　料　室**
図書資料が集中配架してあり直接手にとって自由に選び閲覧席で利用できます。資料の案内や館外貸出の手続きも同時にできるようになっています

■**第2読書室**
軽い読物とか実用書があり特に年配の方や、身障者の方にくつろいで読書していただく室です。

■**目録コーナー**
図書分類により体系的に調べ探し出すための「分類目録」と、書名から引き出す「書名目録」の2種類のカード目録を置いています。

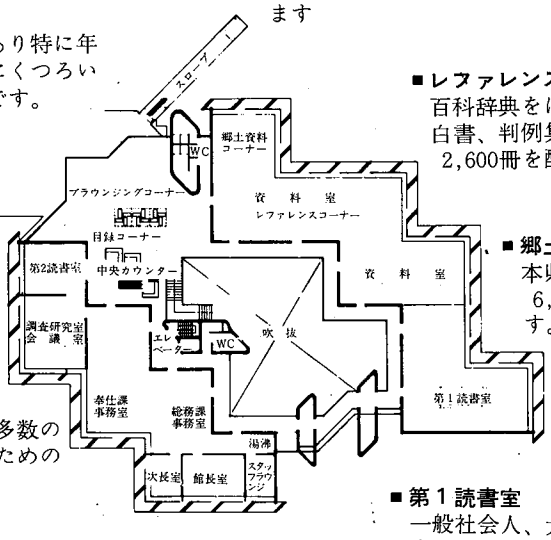
■**レファレンスコーナー**
百科辞典をはじめ辞典類、人名録、白書、判例集など参考基本図書約2,600冊を配架しています。

■**郷土資料コーナー**
本県に関する郷土資料約6,000冊を配架しています。

■**調査研究室**
長期間の調査研究、同時に多数の資料を必要とする利用者のための室です。

■**中央カウンター**
来館者の案内や複写サービス、書庫の図書出納、貸出業務をするカウンターです。

■**第1読書室**
一般社会人、大学生等のための閲覧室で、城山の堀に面し四季を通じ美しい景色が眺められ、絶好の読書環境にめぐまれています。



読書利用傾向調査

―― 館内調査の結果まとまる ――

昭和47年秋の読書週間におこなった「読書利用傾向調査」の結果、つぎのような傾向がわかった。

１年間に本をどれ位読むかという質問に対して、82％が10冊以上と回答している。

本を読む動機については、①37％が自分の考えで、②26％が図書館で現物を見て、③14％が本屋で、または新聞等の広告・紹介によって、という回答であった。図書館の本がある程度活用されていることをこの数字は示していると云える。

どういう目的で本を読むかという問に対しては、62％が娯楽・教養のためと答え、逆に調査研究のためと答えた人がわずか11％であり、レクリエーションとしての読書が非常に多いことを示している。

読書の仕方の一般的傾向として、①自由にその時々の気持で本を選んで読む人が92％も占め、②系統的・計画的に読む人８％を圧倒的に引離している。②を男女別に見ると、男12％、女１％となっており、男女の読書の性格を表わすものとして面白い。

本代には一カ月いくら位あてているかの調査では、78％の人が５百～２千円を使っていると答えており、だいたい平均４・５百円の本２・３冊の購入ということであろう。

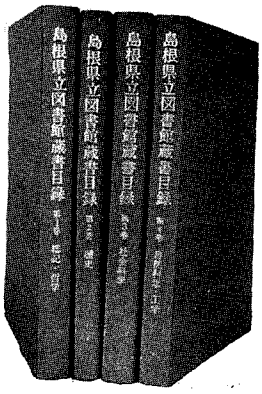
どういう形態の本がよく読まれるかについては、①単行本50％、②文庫本20％、③新書本17％となっている。新書本を男女別に見ると、男22％、女７％となっており、新書本を男性が好んで読んでいることが分った。

なおこの調査ではその他自宅の蔵書量、読書する場所等についてもアンケートをおこなった。

以上のアンケート調査結果から知られることは、最近では読書は楽しむためのものというのが当りまえのこととして考えられ、レジャー時代をよく反映していることである。

このたびの調査は、テレビや他の教養娯楽との関係等については対象外としたが、とくにテレビと読書の関係は、今なお重要な課題であり難問として残されている。

蔵書目録１～４巻できる!!



昭和47年度から当館所蔵資料を冊子式目録に作成するよう作業をすすめていましたが、第１巻（総記、哲学）第２巻（歴史）第３巻（社会科学）第４巻（自然科学、工学）ができあがりました。

続いて本年度は第５巻（産業、芸術、語学）第６、７巻（文学）と作成するよう現在作業をすすめています。

これが完成しますと、県内の各機関に配布し、直接当館を利用できない地域の皆様にも、希望される図書を郵送によって利用できるよう、メール制を実施して、皆様に密着した奉仕を行なうよう計画しています。

自動車文庫運営協議会を終えて

本県の自動車文庫は、昭和29年から今日まで20年間、主として山間へき地の比較的文化に恵まれない地域へ巡回して、地域文化の向上に寄与し住民から親しまれてきた。

しかし県立図書館の自動車文庫は、その性格上より広域的、効果的な運営を図ることが必要であり、そのため受入側の教育委員会の協力・特に直接の担当者である配本所主任のボランティアな協力が望まれるところである。

そこで本年度は運営協議会を各地区で開催することにし、県下４会場で開催した。

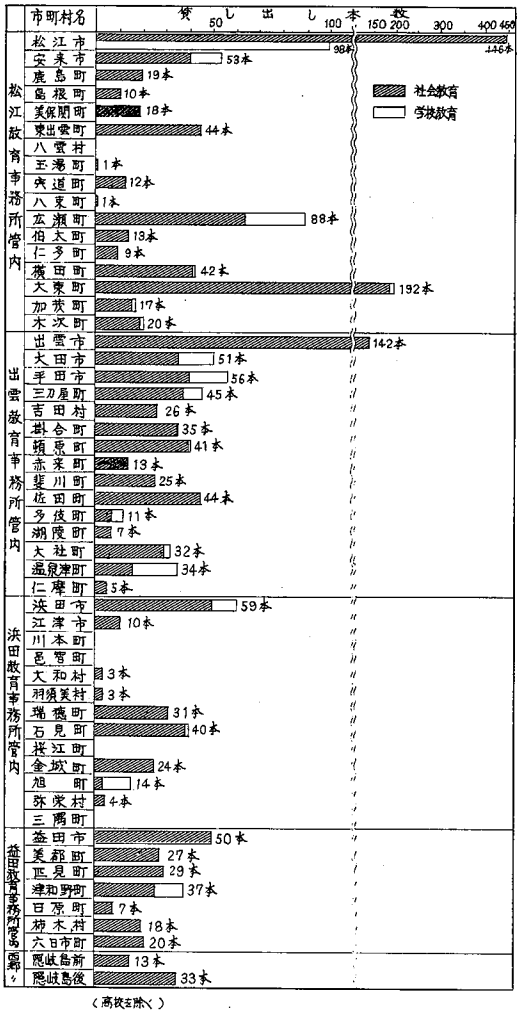
協議会は地区で開催した関係もあってか出席者も多く、図書館側から運営方針や、運営についての細部事項を説明また協力を依頼した。一方、地元側から現場の実情に即した切実な要求もでて両者間に十分なコミュニケーションがなされ予期以上の成果をあげることができた。

この会議を通じ更に関係教育委員会の協力を得て、本年度の自動車文庫の運営と将来への発展を期待すること切である。　（係から）

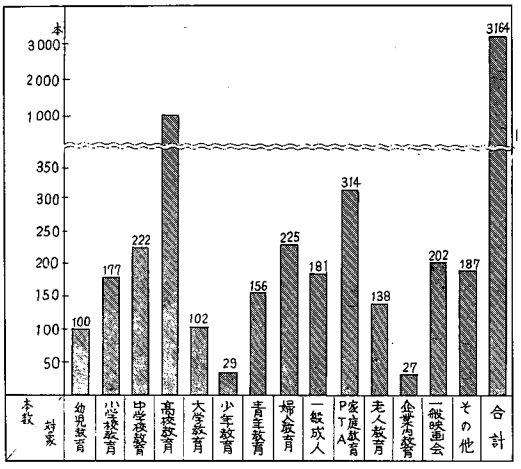
視聴覚の窓

◆16ミリ映画フィルム利用状況

—市町村別—　【昭和47年度】



—対象別—



◆16ミリ映写機登録検査を終えて

当視聴覚ライブラリーは、5月19日から6月15日の期間内に県下11ケ所の会場を巡回し、16ミリ映写機の登録検査を実施しました。

これは、市町村の映写機整備状況を把握し視聴覚事業の発展と円滑な運営をはかるとともに、映写機の取扱い、保守、管理方法等について実情に即した助言、指導を行ない、当視聴覚ライブラリーの貸し出し映画フイルムを、できるだけ完全な状態で県民のみなさんに見ていただくための処置で、その結果本年度は 241台の登録台数がありました。

登録台数もここ数年、順調な延びを示していますが、これも近年学校教育や社会教育において、各種視聴覚教材が使われるようになり、またその必要性が重視されてきたからといえましょう。

整備、点検が軽視された映写機が全体の95％

16ミリ映写機は、極めて精度の高い機械であり、その性能を安定して発揮させるためには、つねに正しい手入れがなされておらなければなりません。このことが映写機の寿命を延ばし、フイルムの保全と映写効果を高めるための必要条件なのです。

検査を通じて一番目立ったのは、フイルム通路の清掃不良でそうした映写機が全体の95％もありました。

特にアパーチャープレート、プレッシャープレートのよごれは、フイルムに傷がつく直接の原因となります。今後映写機を取り扱う場合、映写が終るごとにフイルム通路の清掃を習慣づけるように、心がけていただきたいと思います。

先日返却されたフイルムの中にうれしい手紙が入っていた。

「今回のフイルムは破損があり（中略）中には破損の報告をしない利用者もあるのではないでしょうか。大切な公共物ですから大切に扱ってもらうよう一段とＰＲをお願いする次第です。益高ＡＶ——」益高ＡＶからのフイルムの報告書である。日頃フィルムマナーには頭を痛めているが、こんな手紙をもらうと、係としては実に、心がほのぼのとしてくるのである。